



ICT 海外ボランティア会会報 第 106 号

2022 年 11 月 27 日（日）

URL: <https://ictov.jimdo.com>

EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿

[海外技術協力の素晴らしさと楽しさ](#)

[当会顧問](#)

[加藤 隆](#)

◆JICA の動き

[JICA 海外協力隊 2022 年秋募集](#)

[事務局](#)

◆特別寄稿

[岩槻日記\(21\)](#)

[当会特別顧問](#)

[石井 孝](#)

◆海外グラフィティ

[冒険商人（The Merchant Adventures）への憧れ](#)

[日本ベンチャーネット社長 エッセイスト](#)

[田上 智](#)

◆海外便り

[やどかり族の中国俳柳紀行序章\(1\)](#)

[元 JICA シニア海外ボランティア](#)

[北垣 勝之](#)

◆第 16 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

[事務局](#)

海外技術協力の素晴らしさと楽しさ

－海外ボランティア活動のお勧め－

当会顧問 加藤 隆

私の人生の後半は「海外技術協力」が主であり、現在もその余韻で生活に潤いを頂いている。最初に私と開発途上国との関わりに触れてみたい。

私が電電公社（当時）で初めて海外業務に携わったのは、今から41年前、JTEC（海外通信・放送コンサルティング協力）に配属になったことに始まる。ここで私は JICA による中南米のドミニカ共和国の電話網拡充プロジェクトのコンサルティングに従事した。

これが私に大きなインパクトを与えた。私の業務は日本からの支援が主であったが、プロジェクトの締めくくりに現地へ赴いた。見るもの聞くもの皆新鮮で、完成式典には大統領も参列し、陽気な国民性も手伝って、国を挙げての喜びは一方ではなく、わが国の ODA の素晴らしさとその効果を強く実感した。

続いてバンコック海外事務所へ赴いた。当時電電の海外事務所は7カ所しかなく、バンコック事務所はアジア及びオセアニア一帯をカバーし、業務内容も多様であった。即ち電電の技術を移転することを目的として、覚書を結んだ多くの国の電気通信運営体と、幹部や職員の交流の促進の他、電電から派遣された JICA 専門家や海外青年協力隊員の支援等であった。またバンコックには日本が大きく支援している APT（アジア・大洋州電気通信協同体）の本部もあり、これを通じて多くの国と接触する機会を頂いた。タイは勿論、スリランカ、マレーシア、フィリピン、ミャンマー等々、オーストラリアやニュージーランドにも及んだ。このようなことが出来たのは、高い技術を有し、且つ誠心誠意対応する日本の技術協力が行き届いており、わが国に対する高い評価があったからであろう。

帰国後は、当時の日米貿易摩擦緩和に寄与した国際調達業務に従事し、その後日本コムシス（株）に転出した。当時コムシスは世界各地で通信網拡充の仕事をしていて、タイ・マレーシア・フィリピンにも会社があり、チリ等の同業会社にも出資し人材も派遣していた。その後私は同社のバンコック通信エンジニア会社に転出し、日系の同業他社とタイアップし、タイの電話の大幅な普及に努めた。

そして自由の身になってから、JICA のシニア海外ボランティア（以下 SV）として、三度目のタイへ赴き、バンコック郊外にあるラチャモンコン工科大学で2年間教鞭をとった。この SV 制度は「長年培った技術と経験を開発途上国のために生かすだけでなく、その国の人々と直接触れ合い交流することから生まれる草の根レベルの国際交流」(JICA ホームページより) である。そしてタイ政府からの要請は、産業振興に直ちに寄与できる技術者の育成であった。私が担当したタイの学生は皆純朴で、クラスの纏まりもよく、目上や教師を敬う良き慣習があり、若い学生との交流は清々しく、何物にも代えがたいものであった。

ここで電電公社及び N T T 民営化直後の海外技術協力の様子に触れる。この技術協力には3分野があり、第1に海外の研修者受け入れで、電電は年間約50数カ国から150名、累計で120カ国から約6,000名受け入れた。その他、短期研修生も多数あった。

第2は任期2年強の海外技術専門家の長期派遣で678名に及ぶ。その内訳は、JICA504名、ITU85名、電電自主派遣65名であり、アジア地域への派遣が多い。加えて他短期派



遣は多数あった。第3は青年海外協力隊員で49カ国に490名を派遣している。アフリカ諸国への派遣が多かった。

ここでかつて電電の技術協力の一例としてタイのモンクット王工科大学ラカバン(KMITL)を紹介する。これは1960年に開始されて、当初は「電気通信訓練センター」として発足し、その後大学に昇格した。そして今や医学部を始め9学部で、学生数は2万9千人に及んでいる。学生の質も高くタイの大学で4位で、特に工科系ではトップで、タイを代表する大学である。

当時電電は教官として長期25名の他、短期の多くの職員を派遣した。この功績は高く評価され、電電の総裁を始め幹部が国王から叙勲や大学から名誉博士号を授与された。

現在NTTは海外で大きく事業展開がなされご同慶の至りである。それには電電時代から地球規模で培い、高い評価を得て来た基盤があったことも忘れてはならない。

そこで皆様へのお勧めである。

皆様のようなNTTのOBの方々には多くの技術・業務の知識と経験をお持ちで、しかも海外業務に携わられた貴重な存在である。それで自由の身になられたら、海外ボランティア活動への参加をお勧めいたしたい。例えばJICAのSVの応募もコロナ禍で一旦中止されたが再開の兆しがある。任期は2年だが何度も重ねられる方もいる。そして帰国後は「シニアボランティア経験を活かす会」に入会される方が多い。この会は業種を問わずSV経験者が設立し自主運営しているもので、国内の学校で出前授業をし、自分の経験を基に世界の国々を紹介したりして、楽しみながら各種の社会貢献をしている。そしてそれを通して多くの仲間と協調し、生き甲斐を感じている。年齢制限はない。私もそのメンバーである。(以上)

【冊子「The Contributions to Thailand's Telecommunications by Japan」(45ページ、国会図書館蔵、加藤隆編)を無料進呈いたします。ご希望の方は、下記までご連絡下さい。】
kato2415@jasmine.ocn.ne.jp

JICAの動き

JICA 海外協力隊 2022 年秋募集

事務局

JICA 海外協力隊 2022 年秋募集の募集期間は12月12日(月)正午までです。奮ってチャレンジしていただければ幸いです。また、JICA 主催の説明会が通年で全国各地及びウェブで多数開催されていますので、参加されることをお勧めいたします。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/>

<https://www.jica.go.jp/volunteer/seminar/>

1. シニア案件 <https://www.jocv-info.jica.go.jp/sv/?m=BList>
経営管理1件、品質管理・生産性向上2件、マーケティング1件など。
2. 一般案件 <https://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/?m=BList>
コミュニティ開発81件、統計4件、コンピュータ技術58件、経営管理6件、品質管理・生産性向上7件、マーケティング11件など。

岩槻日記(21)

当会特別顧問 石井 孝



「人事」

会社など、ある組織が良くなるか、悪くなるかには、色々な要因があろうが、何と云っても一番大事なことは、組織が人で構成されていることを考えれば、その組織の人事ではなかろうか。

あれほど出来る優秀な人間が何故評価されないのだろうか。また、あのずる賢い「悪（わる）」が、何故あんなに偉くなるのか。こんな事は、残念ながらまま見受けられるのである。

こういう事になるのは、人事担当の重大な問題である。しかし、よくよく考えれば、またそういった人事担当を選んだ以前の人事担当の問題でもある。

こうしてみると、この問題は、その組織風土にひそむ潜在的な問題なのかもしれない。些か飛躍した結論になるが、組織改革とは、先ずこの所に抜本的なメスを入れなければいけないのだろう。

「ランダムサンプリング」

NHKの世論調査では回答者率が55%、凡そ半数であるという。

最初に選ばれた全ての人達については、確かに「ランダムサンプリング」されていると言って良いだろう。

しかし、回答を回避した約半数を除いた人達が「ランダムサンプリング」されたと言えるのであろうか。

回答を回避した人達は、所謂、くせ者である。この人達の本音を聞いたら、回答した人達と全く同じ結果になるとは、とても思えないのだが。

数学的には、こういった状況下においても「ランダムサンプリング」が成立すると言えるのであろうか、何方かご教授賜りたい。

「返事が来ないメール」

現役当時は読み切れないほどの仕事絡みのメールが入ってきた。面倒くさいが、大事な話も結構混じっているので丁寧にチェックし、即刻、返信を試みたものである。

所がリタイヤして仕事が無くなると、何処でアドレスを調べたものか、広告宣伝絡みのメールばかりである。

また、こちらから現役時代の仕事仲間や友人達に時候の挨拶メールを送っても、さっぱり返事が来ない。偶々会った時に「如何したのか」と聞くと、訳のわからん下らないメールばかりなので、最近「メールは観ていない」と言う。

「ソフトウェア内製」

ソフトウェア内製部門は、ベネフィットを創造するプロフィットセンターです。単純なコストセンターではありません。

ソフトウェア内製部門でソフトウェア開発を行う社員は、ハードで言うなら、ハード

ウェア製造にかかわる製造装置のようなモノです。

ソフトウェアは、基本的に人が創造するものです。

この人達の人件費を、単純に費用と見なすのではなく、内製による「費用対効果」を正当且つ定量的に評価・分析するシステムを創らなければ、ソフトウェア内製部門の弥栄はないと思いますが、いかがでしょうか。

特に、我が国のソフトウェアに対する意識（低さ）の現状を考えると。

「手を汚す」

有形無形のさまざまなサービスやモノを生産する企業の生命線はどこにあるかといえ、やはり、それはサービスやモノを創る第一線つまり現場にある。

最近、現場以外の本社組織とか管理部門とかいった所が幅をきかせるようになっているようだが、現場を軽視して企業が成り立つはずはない。

真藤（恒）さんの語録を拝借すれば、優れた企業の成果（アウトプット）は現場から生み出されるのである。現場の頭脳と汗にまみれた汚れた手が企業にとっては、肝心の鍵なのである。

現場はすっかり下請けに任せ、本社などの管理部門はリモートワークで、企業が繁栄すると言うのであろうか。

「技術開発の目標」

「技術開発の目標」はそれぞれの立場によって異なるものと思うが、いずれにしても、技術で生き残りをかける企業は、自社の「技術開発の目標」を明確にして置くことが肝要ではないか。

私が嘗て働いた組織では、当時、電話の積滞解消と全国自動化が大目標で、そのために必要な膨大な設備投資を如何に効率化するかが重要なテーマであった。

このため、電話網を構築する諸設備（機器）の経済化が「技術開発の目標」であった。

経済化といっても旧式の機器の二三割程度のコストダウンを目指すのではなく、少なくとも五割削減で且つ性能も抜本的に改善する事を求められた。

こうなると、システムの（方式的）な見直しは勿論の事、構成部品の見直し等全面的なやり直しになる。

そして、こうしたプロセス中から新しい実用的な新技術が生まれた。

こうした傾向は昭和の戦後復興期に於ける各企業の大きな特徴であったが、現在、技術で生き残りをかける諸企業は、それぞれの明確な「技術開発の目標」を持って居るのであろうか。

「スコータイ旅行」

この時期になると、タイでのスコータイ旅行を思い出す。

シニアボランティアの仕事も結構忙しく、タイの見物旅行も、なかなかままならなかった。

タイ滞在も、あと半年と思った頃、思い切って、シニアボランティア仲間を誘ってスコータイ旅行を敢行した。

スコータイは、タイ族が建てた初の王朝「スコータイ王朝」が1238年に開かれた都市で、スコータイとは「幸福の夜明け」という意味だそうである。

バンコクの喧騒から離れ、タイの古い歴史を偲ばせる美しい緑の古都であった。

冒険商人 (The Merchant Adventurers) への憧れ

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智



就職は商社にするつもりであった。専攻も「貿易実務」「貿易慣習論」で大航海時代の上乗り商人に憧れを持っていた。上乗り商人とは、港に店舗を構えて商取引をするのではなく、商業航海の船に自ら乗り込んで彼の地に赴き、そこで自ら取引を行う。何せ、大航海時代の船旅は危険極まりない。難破、船員の反乱、先住民からの反撃、壊血病等で8割は命を落とす。最も利益率の高いのは、奴隷貿易であった。利益率がなんと100%であった。上乗り商人とは、まさに「冒険商人」そのものであったのだ。

大航海時代に、ヨーロッパから新天地への航行は、主に次の三つの要素から可能になった。①羅針盤②航海術③地図である。最も著名なのはなんといっても、コロンブスであろう。インドの香料や黄金郷（エルドラド）を目指して、大西洋を横断した。東を目指すより、海路で目的地にはいち早く到達できるだろうと踏んだのだ。そのコロンブスが頼りにしたのが、①マルコポーロの東方見聞録と②プトレマイオスの世界地図であった。マルコポーロ自身も、陸路をたどる冒険商人ではあった。プトレマイオスはAD150年に既に世界地図を描いていたのだから驚きである。日本ではようやく弥生時代である。プトレマイオスの地図は、インド洋が内海で、今のスリランカは余りにも巨大な島であった。

もともと、日本地図の作成に大いに貢献した伊能忠敬や長久保赤水に興味を以て古地図の蒐集を始めたのだが、とんでもない古（いにしえ）に既に世界をにらんでいたプトレマイオスなるアレキサンドリアのギリシャ人地理学者がいたのだ。コロンブスの背中を押したのが、同時代のイタリアの医者トスカネリで、彼の地図を見ると、確かに、ヨーロッパを出発して大西洋のかなたに既にジパング（黄金の国）があり、さらにその先には、インドとなっている。アメリカ大陸が発見された当時、当初、「地理上の大発見の時代」と呼ばれたが、それでは、既にその先住民には大変失礼だということで「大航海時代」となった。

冒険商人が成功の暁には、巨万の富を得て、帰国後は王侯貴族のようにふるまったようだ。貧しい出の青年が生存率20%の大航海に賭けたものはやはり大きかったようだ。大航海時代を経て産業革命に続くが、それまでどちらかというと、東高西低の世界情勢で、インドや中国、中東（ペルシャ）の方が文化の面でも西欧を凌駕していたのだ。

大航海時代が日本に及ぼした影響も大きい。種子島にポルトガル人が漂着し鉄砲をもたらしたのだが、それから、日本は戦国時代に突入し、鉄砲隊を駆使した戦国大名が戦でも主導権を握るようになる。アフリカのガーナに3年間赴任したが、その間、海岸部のエルミナにも立ち寄った。独立前は、ガーナは黄金海岸と呼ばれ、そこからヨーロッパに黄金を積みだしたのだ。その黄金海岸の東隣りは穀物海岸のトーゴ、西隣のコートジボアールは象牙海岸と言い、港から積み出した主要産物はその地の名前の由来になっている。エルミナでは、何気なくポルトガル人が作ったその砦の跡地をなんの意識もなく眺めていた。大航海時代は、3種類のプレーヤーがいた。即ち①軍人（時に海賊）②宣教師（イエズス会）③冒険商人がいたが、富を本国にもたらしたという点では、冒険商人の役割も非常に大きなものがあった。男は度胸である。（2020.12.21 完）

やどかり族の中国俳柳紀行序章(1)

(1996年8月3日～同25日)

元 JICA シニアボランティア
北垣 勝之

<事務局注>本稿はやや古いが、かえって新鮮であり、切にご寄稿をお願いしたものです。

当時イギリスが委任統治していた香港を発着点とした中国旅行記である。およそ11か月後に中国への香港返還(1997年6月末)を迎えるにあたって、中国南西部を巡り、その実態に触れて置きたいとの思いから本旅行を実施することにした。以下、日記風に記す。

8月3日(土)

KA700便にて香港19:05発、桂林20:20着。照明は薄暗く何となく陰気な空港、入国審査を済ませタクシー乗り場へ。辺りには手持無沙汰な人たちが三々五々たむろしている。たまたま乗り合わせたタクシーはHOLIDAY INN HOTELまで60元だと言う。土地勘がなくよくわからないのでこの車で行くことにしたが、後でよく考えてみると確かに割高である。それに車内灯もむき出しの配線を手で繋げないと点灯しないオンボロ車である。幾分人の良さそうな運転手なので乗ってはみたが、真っ暗な道中「ちょっと電話をかける」と言っただけで車を止める。疑心暗鬼の中を2,30分走ってようやくホテルに着いた。小銭が無いので荷物を運んでくれたボーイにチップ10元はやり過ぎである。情報不足の初訪問地、多少の授業料は止むを得ないところか。ホテルで明日の漓江下りの予約をして第一夜の眠りにつく。

8月4日(日)

漓江下り一日ツアーに出かける。ホテルから出発のバンに乗り込み船着き場の竹江港に同道したのは、私たちの他にはUSA Pennsylvaniaから来た熟年夫妻、イタリア人夫婦、それに上海から来た赤ちゃん連れの若い日本人家族である。彼等とは折に触れ語り合いながらのツアーとなった。遊覧船には日本人団体客や他国ツアー客など大勢が乗り込み満員の盛況である。漓江(桂江)は広西チワン族自治区内で柳江と合流、広東省に入って西江となり珠江三角州に到る。だが漓江と呼ばれる流域は奇峰林立、柳枝竹林の岸辺が続き、評判に違わず水墨画の世界そのものである。そうこうしている中に「陽朔(Yangshuo)の山水は桂林で甲たり」の陽朔に到着、下船。後はバンでホテルに戻るだけ。なお6時間のクルージングでは途中、昼食をはさみ冠岩の鍾乳洞見学(2時間)を行う。これまたライフジャケットを着けてボートに乗り、さらにモノレール型観覧車での雄大な洞窟見物となった。夕方、桂林の街中を散策、書道本を渉猟して街のネオンが瞬き出した頃ホテルに戻る。



悠々と山川竹の漓江下り(陽朔)



山水にニックネーム楽し像鼻岩(桂林)

8月5日(月)

桂林に来た時のタクシーを半日借り切って市内・近郊を巡る。運転手の欧陽運国さんは、英語を少し勉強している14歳の娘さんを助手席に乗せて、私たちとの通訳代わりにさせようと張り切って午前8時に迎えに来た。桂林最大の鍾乳洞「蘆笛岩」を見学の後、実弾射撃場に連れて行かれる。私は平和を愛する人間なので人殺しの道具を使って遊ぶ気はありませんと断ったが、見るだけでもよいかと勧められ小銃を手に取り実弾を入念に眺めて責めを果す。戦後間もない子どもの頃、派出所のお巡りさんにピストルを触らせてもらった時の事を思い出す稀有な体験であった。

桂林博物館にも立ち寄る。ガイドさんは近隣の少数民族について詳しく説明してくれた。広西チワン族自治区には漢族のほかに36の少数民族が暮らし、その総数は約1800万人(自治区全体の人口比では約22%)、そのうち最大民族はチワン族(少数民族比85%)が占め、他にヤオ族、ミャオ族、マオナン族等の少数民族が続く。

次に、博物館の隣りにある桂林市西山公園桂林熊本友誼館の中日友好中医医療諮問部を訪れる。暇そうにしていた白衣の案内人が我々を見るやいなや、すぐ二階の治療室に導く。何が始まるのか不安げな我々に諮問部の程連壁氏がお茶を勧めながら、日本語で同部が今までに施してきた東洋医学の実績を少しずつ話し始める。やがて電気治療との併用によりその効能が格段に現れることに触れ、無料なので体験してみてもどうかとしきりに勧める。相手は客もなく暇を持て余していた所に飛び込んできた火中の虫に興味を持って貰おうと一生懸命である。我々も乗りかかった船、ものは試しと体内に電流を通す治療に挑戦することにした。治療師の手を通して弱電気が流れ、自分の意思とは裏腹に各部の筋肉があたかも痙攣したように反応する。これにより体の疲れもとれ肩こりも治ると言う。信ずるべきか信じざるべきか。最後に当医院の秘伝処方になる漢方薬を持ち出し、今後長期に服用すれば如何なる難病も必ず治ると17に互る効能書きの説明を受ける。一連のパフォーマンスの狙いは此処にあったのかと合点した次第である。だまされついでに一瓶600元の黒粒漢方薬を500元に値切って購入することにした。二人で約一時間の遊び代にしては高い買い物かもしれない。人生初めての経験を土産に同所を後にした。因みに9月以来言われた通り毎日10粒ずつ服用している家内は、持病の関節炎が最近あまり起こらなくなってきたと言う。これが本当なら、かつて幾つかの病院検査でも分からなかった宿痾が治ると言う快挙になる。

続いて象鼻山見物に行く。タクシーは喧噪の街中を横切り、遠くに象の形をした岩が漓江の水を飲む姿を望めるところに出てきた。川岸から30mばかり離れた中州へ渡ろうと小舟のおばちゃんと交渉を始める。最初往復20元と言っていたのを10元に負けさせて舟に乗り込んだ。大きな岩穴の舟着き場に待たせて小高い丘に上り市街の眺望を楽しむ。タクシーの待つ川岸に戻ろうと小舟のいる所に来ると、往路の女船頭の姿が見えない。やむなく他の船頭に戻りの舟を出すように頼むと新たに10元よこせと言う。冗談じゃない。それならオレが勝手に漕いでいくから櫂を貸せと強引に舟に乗ろうとした。すると先方も折れてしぶしぶ舟を出してくれた。つい目と鼻の先の距離を行くのにとんだ芝居をしなければならぬ。全く油断がならない。

最後は飛行場への途中だからと美石宮へ立ち寄る。どうと言うことはない。珍しい形をした貴石の博物館であった。一人30元の入場料はちょっと高い。新しい飛行場はここからそう遠くない所に建設中で、この9月某日から開港の予定になっていると言う。これで一昨日の夜、桂林に着いた時の空港のみすぼらしさを納得した次第である。空港関係予算は多くを新空港オープンに回し、旧空港への設備投資を控えていたからなのだ。かなり走って午後2時頃、桂林飛行場に着く。半日貸し切りドライブ代140元に対し、運転手の欧陽親子に昼食の足しにして貰おうと200元渡し桂林と別れることにした。来た時と違い昼間見る辺りの牧歌的田園風景は素晴らしかった。

CZ8947 便にて桂林 15:05 発、昆明 16:40 着、市中との連絡バスに乗るため空港出口で

うろうろしていると、客引きがきて一人 20 元の高いバスの方に連れて行こうとする。それを振り払い一般の乗り合いバスに乗る。一人 2 元。市中に入ると少々渋滞気味であったが、無事これから 3 泊お世話になる昆明飯店に着く。ホテル内にある雲南友好旅行社で明日の石林一日ツアー(一人 450 元)を申し込む。夕食はホリディイン・ホテル内のウェスタンバイキングで済ませ、さっそく付近を散策して土地勘ならしめる。

8 月 6 日(火)

石林一日ツアーに出かける。客は私たち二人だけ、あとはガイドと運転手の四人でドライブすることになる。ガイドの段建榮さんは 22 歳、人当たりの爽やかな青年である。英語が話せないのでコミュニケーションは中国語で行う。小生の普通話の知識を総動員して足らざる所は筆談でカバーする。彼曰く、雲南省で世界的に有名なものは、①漢方薬：天麻(脳病)・杜仲・三七(止血作用)など。これとともに東洋医学の宝庫であり、雲南省中医学院から多数の名医が輩出している。彼等は病人を診てたちどころに適薬を処方する。②玉石類：ビルマ(ミャンマー)との国境地帯から産出される良質の石を使った硯・美術工芸品など。③中国書画、少数民族の衣装と手編み絨毯や壁掛けなど。なんでも欲しいものがあれば購入のお手伝いをさせて頂くと言う。

小型バンは快適に石林に向かって走る。途中街道に面した政府直営の大きな土産物店に立ち寄る。あれこれ陳列商品を見ているうちに、ふと清代康熙の作になる一對の徳利に目が止まり値段を訊いてみる。高さ 20 cm 程の恐らく祭祀に使った品であろう。売値は 2700 元だがいろいろ交渉しているうち最終的に 600 元になった。しかし私が欲しいの是一对ではなく一本だけでよい。いやがる店員をなだめて一本だけ 300 元で買い店を後にした。ところが車に戻って走り始めると、ガイドの段さんが曰くには、この祭器は二つ揃って美を完成する。どうせ買うのなら一對の品として購入すべき代物であり、それこそ「吉祥如意」の意味があると言う。縁起ものであるならなおさらのこと一本では気味悪い感じがつのり、帰途再びこの店に立ち寄ってもう片方の徳利も買うことにした。おかげで現在わが家では同じ 2 本の祭器が相並んで飾られ、どことなく安泰感を醸し出している。

片道 3 時間かけて石林に着く。地元民族料理の昼食を済ませ石林公園に入る。いたる所でカラフルな民族衣装をまとったサニ族の若者たちが観光客相手に道案内をしている。大昔海底だったこの地が隆起して海水が退いた後、このような奇岩の織り成す迷路を作り上げたと言われる。上ったり下ったりの繰り返し見物を約 2 時間行って、往路と同じ道をたどり昆明へ帰る。ホテルで明日と明後日の夜行バス大理往復便の予約を行い、近くの大衆レストランでタイ料理の夕食をとり一日の予定を終了。



奇岩なるジャングルジムの遊園地(石林)



派手派手の民族衣装に迎えられ(石林)

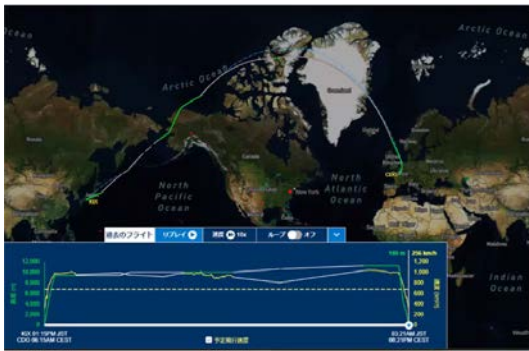
ウェブサロンの話、あれこれ

第 16 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

第 16 回 ICT 海外情報ウェブサロン(遠隔井戸端サロン)が 2022 年 11 月 26 日(土)19 時～21 時 15 分、ウェブ会議室において開催された。当会の松田幹事による「今どきの海外旅行諸事情」の話題提供があり、参加者からの活発な質疑・意見提起があった。主な話題を以下に示す。

- ・ 2 年前にフライト予約したが、コロナ禍で日程、訪問地などを数回にわたり見直した。ウクライナ関連による飛行ルート変更やフランスの航空管制官ストライキなどが影響に拍車をかけた。北半球世界一周ルートとなった。



- ・ 出発当日にも変更があり、ミラノの宿泊予定は不可(No show)となり、パリで航空会社手配の仮宿泊、チューリッヒ経由でフィレンツェを訪問した。旅行終了後、旅程変更による損失補償を航空会社に請求し、2ヶ月後に入金された。
- ・ チューリッヒ乗り継ぎでロストバゲッジがあり、フィレンツェでは不自由な滞在を強いられた。次の便で届くと言われたが、実際は翌日昼頃であった。自分の荷物が積み込まれなかった場面を機内から確認したので、CA に伝えたが、そのまま離陸した。



(Zurich国際空港にて)
これは珍しい!
CDGで預けた荷物が乗継のZurich国際空港で、乗り継いだ搭乗機に積み込まれるのが確認できるのだ。
スーツケースはPriority扱いのため、到着地で優先的に出するため、積載は最後になっている。



いよいよ、わがスーツケースの積み込みの順番だ



あれれ! 積み込まれるはずの我がスーツケースが、機体から遠ざかっていく。そして搭乗機が動き始めた。わがスーツケースはどうなるのか? 前方では、これを見届けた乗客が、CAさんに食って掛かっている。私もCAさんに強く申し立てたが、搭乗機はそのまま離陸した。(Lost Baggageとなるの見届けるとことになるとは!)

- ・フィレンツェでもパリでも、一部観光客を除き、マスク姿はほとんどいなかった。フィレンツェは人口 40 万人足らずの都市であるが、世界中からの観光客で溢れていた。



- ・今回の旅行で重宝したものとして、①ahamo の利用、②翻訳アプリ、③MySOS が上げられる。①は通信だけでなく歩行、交通機関利用でのナビゲーションなどにも活用した。②は特殊なリクエストなどの際に現地語で会話するのに有効であった。③はワクチン接種証明で円滑な手続きが可能となった。
- ・航空会社のクレジットカードによる買物でマイルージがたまったので、今回は 44 万マイルを使用して家族 4 人分のビジネスクラス航空券を入手したが、これにもかなり苦労があった。



参加者から多数の質問や意見があった。個人企画旅行とパッケージ旅行の比較、良いホテルのコンシェルジュは交渉力が高い、ロストバゲッジの思い出、現地で英語ツアーを手配すると安い、英語ではなくスペイン語が効果的だった経験、元社会科の先生の現地ガイドは裏話などがあって面白い、米国には個人による旅行斡旋事業者が多く非常に親切、南米出張・旅行の思い出、自動車による現地国内旅行は風景・思い出が変わる、ロシアやアフリカを訪問してみたい、ストラスブルグ(フランス)はお勧め、などなど。このように、予定の 20 時 30 分を 1 時間くらい越えるまで密度の濃い熱い意見交換があり、真にウェブサロンの雰囲気であった。



編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 106 号を発行することができました。今回は当会の加藤顧問から「海外技術協力の素晴らしさと楽しさ」の特別寄稿をいただくとともに、海外グラフィティのご寄稿継続のほか、北垣様から新たに「やどかり族の中国俳柳紀行序章」のご寄稿をいただき、誠にありがとうございます。

これまでのご協力を改めて心より感謝するとともに、当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿と ICT 海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

<https://ictov.jimdo.com/コメント/>

発行： ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当： 空席のため募集中 (編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)
ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)